

実りの秋と一年の巡り。

この連休中のあちこちでの秋祭り（村祭り）。大地の地元での秋祭りの花火は昔から盛大です。花火と言えば秋祭り。この花火は、田んぼの真ん中（目の前30メートル位か）から打ち上げられ、首を90度にまげて真上を見上げる。そして、自分の頭の上に火の粉が落ちてくる。これが幼少期からの花火の原風景。そして庄巻は、実った田んぼの稲が、純金金色色の絨毯として輝く光景です。まさに五穀豊穡を祝う秋祭りの絶頂です。この姿を見るにつけ、1年の巡りに鳥肌が立つ瞬間です。

加えて、リンゴが赤く実り、栗が地面に賑わいを与える季節の中、子ども達もこんな原風景を刻みながらと願う訳ですが、それには、まず食べるといふ事が、子どもたちの一番の原風景を刻む条件のような気がします。こんな日々、すいか、桃、栗、リンゴ、ブドウ、ナシなど、2学期に入り次々に秋を味わっている子ども達。極めつけは、来週の稲刈り、米でしょうか。これで実りの集大成を迎える訳です。

こんな1年の巡りの中、季節の流れ、時の流れを実感できるのは、大地にとっては、正月新年よりも、この秋口かもしれません。余談ですが、父親がサウザン前で開店しているリンゴのお店。今や、長寿リンゴとして訪れる方が多く、皆口々に「今年も無事元気でいるんだね」と声をかけてくれるようです。この店が今年も開けるといふ事は、青山家全員今年も安泰だと実感できる訳です。

そんな意味で、秋と言う季節は、大地にとって、子ども達にとって、青山家にとっても、感慨深い季節です。今年は、妖怪達が田んぼを見守り、1年を通じてのテーマとして進んでいます。



【今、明治が最先端！！】

夏の甲子園が終わり、青山家から野球の影が消えました。末っ子の人生も急展開して、話せばきりが無いのですが、今回もそのドラマは先送りして、乞うご期待！！

最近、明治生まれの人の生き方を本で読みました。気合いが入っていて感動。これは是非皆さんにお伝えしたいと思ひ、ここに登場します。賛否両論、今の時代にどうか。

- ①日本人は、心身共に逆境に耐えて生き抜く力を養い、もっと人を見ぬく勉強をすべし。そして、自分の思考形態と違う相手をも受け入れ、妥協点を見出し、犠牲の少ない生活を共有する知恵が必要。マスコミも政府の悪口批判を言うが、それではそんな政府を頼らず自分の事は自分で守る人間になれとは、社会に言わない。生き抜く力とは、ライフラインが止まっても、どうしたら人間が、冷静さ、思考の停止、弱い者を助けるという人間性を失わないでいられるかという事。自分でできる範囲の責任を果たす姿勢を鍛えていく。「天気予報の精度が発達した日本で、災害のたびに、安全な建物に避難する人々になぜ無料で給食を配るのか。」明治生まれの人々は、まずご飯を炊いて大きな梅干し入りのおにぎりと毛布を一枚持って避難した。それで、大抵の人間は死ななかつた。握り飯を作れない老人のために、必ず一つ余分の握り飯を作って持っていく人間がいたからだ。
- ②最近、実にもらうことに平気は人が多くなった。「もらえば得よ」「もらわなきゃ損よ」などと、介護保険などの分野でも声高々。明治生まれの世代では、教育の程度は低くても、別の美学があつた。精神の浅ましきはなかつた。遠慮という言葉で表される自分の分を守る精神もあつたし、受ければ、感謝やお返しをする気分がまず生まれた。
- ③明治生まれの世代は、自分でつましい生活をして貯金をして、老後に備えることを常識とした。借金をしなければ買えないものはお金を貯えてから買いなさいと教えられた。ローンを作れば何でも買える、借金を残せば相続税も安くなるなどと悪知恵を教えたのは誰なのか。他人が持っていて、自分には贅沢だと思つたら持たない自立精神はどこへ行ったのか。経済について最悪の状態を常に想定する。財布は人に頼らない。こんな素朴な事は、昔、小学校にさえろくに通えなかつた人たちでもわかつていた平衡感覚である。
- ④心配とか恐怖とかいうものは、人間が不必要なものをたくさん所有している時に起こるもの。「ないものを数えずにあるもの（受けているもの）を数えなさい」この知恵に満ちた姿勢で、てきめん幸せになるでしょう。
- ⑤誰もが苦しみに耐えて、希望に到達する。努力に耐え、失敗に耐え、屈辱に耐えてこそ、目標に到達できると教えられた。誰も苦しみになぞ耐えたくない。順調に日々を送りたい。しかし、人生というのは、けっしてそうはいかないものだ。更に皮肉なことに、人生で避けたい苦しみの中にこそ、その人間を育てる要素もある。人を創るんは幸福でもあるが、不幸でもある。しかし、現代は不幸の価値は認めない。だから苦しみが必要な仕事は避け、努力が要るものは学ばなくなった。少なくとも昔の比べると、プロの比率が減り、アマばかりになった。「昔はいた」という仕事師が、皆無でないにしても、ぐんと減つた。
- ⑥成功した人生とは、一つは生きがいの発見であり、もう一つは自分以外の人間ではなかなか自分の代替えが利かない、という人生でのささやかな地点を見つけることである。そして、自分の得意なものを発見して、それを一生かかってし続ける事、それには持続力といささかの勇気が必要。命を掛けた勇気ではなく、ただ人に少し嫌味を言われたり侮辱を受けたり、金銭的な不遇時代を堪え忍ぶ勇気だけ。しかし、それも好きな事をしているのだからそんなに辛いわけでもない。人生に面白さは、そのために払った犠牲や危険と、かなり正確に比例している。冒険しないで面白い人生はないだろう。

清貧な爽やかさ、ピリっとした気概、魂の美しさ、人間としての品、凜とした気合い、そんな気分が酔いしれた自分がいました。そして、自分たちの人生はどうなのか、自分たちの子育て、自分の子どもたちに対してはどうだったのかを考えました。

そんな中で 長男の最近の生き方、そして、長男の関わる友人たちの生き方を見ていると、なんだかこの明治の精神に似ているんですね。驚きました。まさに清貧な素朴な生き方をしている若者がたくさんいるんです！！ 田んぼや畑で無農薬、古民家に住んで自給自足、自分の大好きで得意な事をする、物欲や所有欲が低い、オーガニックで東洋医学系やアジア圏を好んだり。もしかすると、明治が最先端！！

更に 「江戸もいいかも」 貝原益軒の養生訓という本もいいですよ。「小児をそだつるは、3分の飢と寒とを存すべし」この教訓はいいですね。養生訓は、現代でも十分通用するオーガニック最先端の本です